

漆をめぐる民俗学的諸問題

Folklore Issues Surrounding Lacquer

小池淳一

KOIKE Jun'ichi

- ①本稿における課題設定
 - ②漆の民俗研究素描
 - ③近世社会における漆栽培と伝書
 - ④漆の俗信と説話
- おわりに

【論文要旨】

漆は日本列島上の生活文化において、きわめて重要な役割を果たしてきた。産業構造の変化によって、漆の位相は前近代とは大きく異なっている。端的に漆の価値と社会的な重要性は大幅に低下したといつてよい。その点で漆は過去のものになりつつある。しかし、だからといって民俗的な価値はなく、その追究は不要であるということはない。

本稿では、かつての生活の諸場面における漆の様相を民俗学の立場から総合的にとらえていくための予備的な考察をおこなう。そのために、ここではまず、従来の民俗学における漆をめぐる調査・研究の成果をふり返り、そこでの問題意識と具体的な調査内容とを確認する。次に漆をめぐるさまざまな民俗事象が形成される背景となったであろう漆栽培とその樹液をめぐる近世の様相を、北奥羽地方（弘前藩）の史資料をもとに確認する。さらに漆をめぐる伝承されてきた俗信や説話をとりあげ、そこから見出される生活世界における漆の問題を考えてみたい。つまり本稿では、近世以降の漆をめぐる史資料を概観し、漆の民俗研究を進めるための問題群を確認することを目標とし、課題の解決というよりも漆をめぐる民俗学的な課題の確認とこれからの考察の方向性とを提出することを試みるものである。

結論として、漆をめぐる民俗的な研究課題としては、第1に木材としての漆の生態と利用、第2に地域のなかでの漆の生産と技術、第3に遠隔地をむすぶ漆の樹液の流通と人びとの移動、第4に近代化過程における漆の位相、第5に漆をめぐる俗信と説話およびその背景、といったものが挙げられるということが導き出された。

【キーワード】 水漆、漆掻き、越前衆、かぶれ、「木竜うるし」

①……………本稿における課題設定—網野善彦の問題提起から

漆は日本列島上の生活において、さまざまな場面で重要な役割を果たしてきた。その樹液は接着や塗装に用いられ、その始まりは、12000年はさかのぼるとされている〔国立歴史民俗博物館編2017〕。合成樹脂や接着剤の開発によって、前近代ほど漆の用途は広くはなくなっている。しかし、装飾・荘厳のために用いられる場合には固有の領域を残し、漆そのものの植生に規定されながら、アジア的な美術工芸の分野での重要性はよく知られている。本稿はそうした漆をめぐる民俗研究の立場から、調査研究の可能性を模索するものである。

日本の民俗学において漆は注目が全くなされなかったわけではないが、確固とした研究ジャンルとして確立されているわけではなく、いくつかの領域において個別に分断されて、調査・研究が進められてきたといえる。そのことは、漆に関して民俗を起点とする独立した研究書が、近年の工藤紘一によるもの〔工藤2006, 2011〕以外はなかったことからもうかがうことができる。この工藤の研究については第2節で検討を加えたい。また漆をめぐる文化史という命題については、四柳嘉章による研究〔四柳2006a, b, 2009〕のような包括的かつ具体的なものも提出されている。

本稿では、そうした生活の諸場面における漆の様相を、改めて民俗学の立場から総合的にとらえていくための予備的な考察をおこないたい。そのために、ここではまず従来の民俗学における漆をめぐる調査・研究の成果をふり返り、そこでの問題意識と具体的な調査内容とを確認する。次に漆をめぐるさまざまな民俗事象が形成される背景となったであろう漆栽培とその樹液をめぐる近世の様相を、北奥羽地方、特に弘前藩領の史料を中心に確認する。そして、さらに漆をめぐる伝承されてきた俗信や説話をとりあげ、そこから見出される生活世界における漆観とでもいうべきものを考えてみたい。

つまり本稿では、近世期以降の漆をめぐる史資料を概観し、漆の民俗研究を進めるための前提となる作業をおこないたい。これまでの史資料および調査研究の視点を確認し、課題の解決というよりも、漆をめぐる民俗学的な課題とこれからの考察の方向性とを提出することとしたい。

こうした問題を考えるにあたって、前提としなければならないのは、前近代における漆とその社会的な価値の様相である。考古学のみによって解明される時期のそれも重要ではあるものの、ここでは文献記録類を併用しながら、それをうかがうことができる中世段階から出発しよう。

歴史学の網野善彦は、中世考古学との協業を意識して「栗と漆」（原題「考古学と文献史学—栗と漆をめぐる—」）〔網野2001〕という論考を発表している。日本史ではなく、日本列島上の人類史を志向した網野の壮大な構想と作業の一環といえる考察である。考古学の成果に基づく課題を改めて文献資料を検討し直すことで協業に発展させようという意図によって書かれており、漆の民俗を考える上でも示唆に富むものである。以下、そこで明らかにされている問題を整理し、漆をめぐる考古学、文献史学の研究に民俗学の視点を加えることを意識してみたい。

まず網野は、支配側の記録として、『延喜式』主計式において漆の貢進が確認できる国は、美濃、上野、越前、能登、越中、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、備中、備後、筑前、筑後などであり、その様相は中世にも変わることなく、日本海沿岸の北陸・山陰諸国が漆の貢進国であったと指摘す

る〔網野 2001：140〕。中世における荘園の検注の記録などを検討しても、漆の栽培本数とその対象となっており、特産品としての位置づけがなされ、また贈答品としても用いられていたことが判明する〔同前：141〕。このように荘園経営、そのなかの土地利用の一部として漆の栽培が行われており、国家や権門の側からも注意がはらわれていたのである。

こうした漆はそのまま換金されることなく、京都などに送られ、そこで使用に供されたものと考えられ、漆の利用が、中世段階における列島内の交通を前提として組み立てられていたことも重要である。さらにそうした漆を掻く技術も荘園社会に広く存在しており、漆を用いて、おそらくさまざまな生産作業に従事した塗師や轆轤師も奈良や京都に限らず、漆の産地でも数多く活躍していたものと推定できる。これは縄文時代以来の漆をめぐる生産と技術が社会に深く根づいていたことを示している〔同前：142-144〕。中世における漆の栽培地域の偏り、漆液の列島内の移動、在地社会を含む広い地域における漆を扱う技術者の存在などといった課題が史料に即して、指摘、確認されているのである。

漆をめぐる民俗的な問題として、こうした成果を受け止めるとするならば、まず、その第一は、漆は交流・交通を前提として栽培、採取、利用がなされていたということに注目しておきたい。漆は日本列島における特産ともいえるものであるが、列島内でも栽培可能な地域は限られており、漆液の需要にこたえるためには、生産地から使用地、消費地への運搬が不可欠であった。このことは他の租税対象と同様であるが、利用可能なかたちで漆液を移動させるには一定の知識と技術とが必要であり、そのこと自体が列島内の生活知として、中世社会に保持されていたのである。

第二に、漆液の利用が、奈良や京都あるいは鎌倉などの限られた都市的な空間ばかりではなく、荘園などの在地社会においてもおこなわれていたことは、漆を塗る技術者とその作業を支える知識や道具も広がりを持って存在していたことを示している。このことは列島内の広域での交流・交通の一方で、地域ごとの漆をめぐる文化や技術の特徴、偏差を生み出す可能性につながっている。そして、それによって地域ごとの塗布の技術や特産品などが生み出される素地がすでに中世において準備されていたことに注意すべきであろう。

こうした列島の社会史からの問いかけに対して、民俗学的な研究の蓄積はどうであろうか。次節ではその検討を行いたい。

②……………漆の民俗研究素描

漆掻きに関する民俗調査として比較的はやい時期のものに河岡武春による「吉野の漆かき」〔河岡 1969〕がある。これは奈良県西吉野村賀名生の漆かきの様相について近世史料をふまえ、また広範な人の移動や技術の伝播を含めて記録、考察したもので、その後の日本各地の漆かきをめぐる民俗調査の規範となったものといえる。

ここでは、「漆や、漆かきの問題が、あまりにも美術工芸としての漆器のかげにかくされて、あきらかにされないことに不満をもっていた。それらが、重要な山村の一生業であったからというだけでなく、もっと広く、常民文化として捉えられなければならない」〔河岡 1969:49〕と述べられ、近世の漆の産出記録をもとに、吉野の漆掻きが技術的に優れていて、各地に招かれ、あるいは自ら

求めて移動し、漆液を採っていたことが示されている。そして賀名生のような漆掻きのムラが成立するには、漆掻きだけではなく、それに加えて木地屋と塗師との三者の結びつきが必要であったとする〔同前：54〕。漆掻きとその技術は孤立したものではなく、山村社会における経済的な連携のなかで息づいていたのであった。

漆掻きの実態については、賀名生村湯塩での聞き書きによって復元を試みている。ここで聞き取りの対象となったのは、漆の木の選定、漆掻き作業の準備、木の幹へのキズの付け方、作業の進め方といった技術論的な側面とカマ、カンナ、ヘラ、ゴウ（盆）、ツルベなどの道具類の実測と用法といった民具論的な側面であった。さらに漆掻きの人々の移動に伴う組織や賃金、宿や服装といった職人としての側面も明らかにされている〔同前：57-73〕。漆をめぐる知識・技術・人間といった観点からの問題登録が行なわれたとあってよいであろう。なお河岡はのちに、こうした聞き取りを簡略にまとめている〔河岡1985〕。

この河岡の調査報告を嚆矢として、各地から漆と漆掻きに関する民俗調査報告が提出されている。隣接する歴史学、地理学などの業績にもなるべく言及しながら、地域ごとにその様相を確認してみよう。

まず、東北地方では工藤絃一の研究が卓越している。工藤は岩手県二戸地方および同地方と隣接、関連する地域における綿密な調査に基づいて『南部の漆を支えた人びと一越前衆の軌跡一』〔工藤2006〕と『いわて漆の近代史』〔工藤2011〕を刊行している。さらに、全国に出稼ぎしていた越前衆以前の漆掻き道具の探求過程を述べた〔工藤2015〕や明治政府によって把握され、認識されていた明治末から大正にかけての漆の生産事情や中国からの輸入の様相などを考究した〔工藤2017〕なども発表しており、広い知見と柔軟な方法で、この地域の漆ばかりではなく、国産の漆の軌跡と直面している課題について論じている。民俗学的な漆研究の第一人者であり、漆の民俗研究の中核とあってよい研究を積み重ねてきている。さらに、工藤には漆職人のライフヒストリーに取り組んだ「漆かき一代 一砂森栄三男の記録一」といった仕事もある⁽²⁾。岩手の漆に関しては〔瀬川2011〕でも概況を知ることができるほか、国産漆の現在、最大の生産地である二戸市浄法寺における漆については〔柳橋1985〕や〔羽生編2019〕などもある。

他の東北地方の漆に関する調査研究としては、山形県村山地方の近世期の漆生産と流通を渡部史夫が整理しており、水漆（漆の樹液）の生産（掻取り）に加えて荷送についても越前方面からの資本の流入があったことを明らかにしている〔渡部1989, 1996〕。福島県会津地方における漆器の生産については地理学から馬場章の研究〔馬場1981〕が提出されている。

漆器生産が盛んであった北陸地方では、輪島における漆器の生産や流通についての研究が目立つ。管見に入った民俗研究とその周辺に位置するものを挙げていこう。輪島をはじめとする東日本の漆職人（漆掻きと塗師）をめぐる社会的経済的問題を教育社会学の視点からあつかった佐藤守らの研究〔佐藤ほか1962〕は、副題に「漆器徒弟の社会史的分析」と名乗っているように、民俗的な擬似親族組織の問題や、漆器生産をめぐる社会的慣行の問題を扱っており、民俗学的な考究の出発点にすることができる。輪島における漆器業の発展や変遷をとらえた須山聡の研究は地理学に属するものであるが、漆器製造をそれに携わる人びとの動きに着目して検討している点で示唆に富む〔須山1992, 1993〕。頼母子講の具体的な分析の対象として、輪島の漆器業者を選んだ松崎かおりの論考は、

期せずして漆器をめぐる経済伝承を解明しており、重要なものといえる [松崎 1993]。ここでは漆器の販売に際して、輪島で広く行われていた頼母子という講を販売先にも応用して、高価な漆器を購入するためのシステムを漆器業者が日本各地に移植していたことが解明されている。

また輪島の生産構造の変化を把握する視点で福井県鯖江市の漆器工業の分析が、馬場章によって試みられている [馬場 1990]。さらに魚津漆器の店舗の調査記録 [広田 1992] や金沢の漆器職人のライフストーリー記録 [竹内 1984] は北陸における漆を軸とした人々の動きを考える際に重要な材料を提供してくれる。なお、木地から漆器までの一連の作業、木地師と塗師の技をとらえた須藤護『越前漆器を訪ねる 一越前大野の木地屋と河和田の塗師一』 [田村・宮本監修 2012: 169-221] も漆をめぐる土地として重要な越前地方に焦点をあてた研究として注目すべきである。

関東地方でも漆掻きの活動が行われ、その様相の記録と記憶とがとらえられている。東京都多摩地方の近世における漆の採取、生産量の変遷については坂上洋之の研究 [坂上 1989] があり、埼玉県秩父地方での漆掻きの姿も主として、聞き書きによって復元されている [高橋 1996]。近世期の漆は、最初はその実が蠟の原料となる点に注目が集まり、近世後半になると樹液の採集、課税対象化が急速に進展したことがこれらから解明されている。それによって漆の地域における栽培、残存の様相にも大きな影響があったのである。

中部地方では長野県の本曾谷の漆器職人の聞き書き [巻山 1992] があるが、ここでも地理学の馬場章による静岡、本曾における技術変化と産業構造の変動との関わりが、漆器工業を素材として論じられている [馬場 1986]。断片的な聞き書きから、漆器をめぐる産業構造への視点を拡張していく点に学ぶべき姿勢を見出すことができる。

西日本では管見に入ったものが必ずしも多くない。先にも触れた河岡武春の先駆的な調査成果 [河岡 1969] 以前に、やはり和歌山県吉野地方における山村生活のなかで、漆に注意すべきことを岸田定雄が指摘している [岸田 1961]。広島県の山間部、神石郡下のいわゆる備中漆については久岡武美が詳細な聞き取りを行なっている [久岡 2008]。また、徳島県美馬郡半田町の漆器生産の衰退過程を描いた姫田道子の『うるし風土記 阿波半田 一消えた漆器生産地を訪ねて一』 [田村・宮本監修 2012: 7-14] は産地の盛衰、とりわけ消滅の過程に注目するという点で示唆に富む。

以上、地域ごとの漆をめぐる民俗研究を概観すると、東日本における調査研究が多く、西日本のそれは少ない。しかし、このことは漆の過去から現在に至るまでのそれぞれの地域における重要性をそのまま反映しているわけではないだろう。漆をめぐる地域における記憶が息づき、漆掻きや漆器作りの経験者が多いのが東日本であるために、民俗的な視点での調査研究が成り立ちやすいのである。その結果として東高西低とでもいうべき研究状況が生まれたのであろう。

現在の漆に関する民俗的な調査は、こうした地域における漆関係の人と資料の残存とに規定されており、それが研究の蓄積の偏りとなっているといえる。それは民俗研究が聞き書きに基づくものであることから、致し方ない点でもある。しかし、実際の作業の経験、それもそれを長年反復し、積み重ねてきた人に、直接質問をし、疑義を問いただすことによる聞き書き資料を利用することで、過去の史資料も、より深い読解が可能になるであろう。その点を民俗研究の手法の利点として確認しておきたい。

以下、卓越した漆の民俗研究書である [工藤 2011] の各章に沿って、民俗学的な立場による漆の

調査・研究の広がりや相互の関係を確認しておきたい。

最初に押さえるべきなのは、漆をめぐる史料の問題であり、それに基づく史的な叙述の可能性の追求である。近世期のいわゆる藩政史料における漆の記述が見出される一方で、菅江真澄やエドワード・モースなどの見聞記録などがその対象となっている。これらからは漆の植生や膳椀類の製作と流通、それに携わる職人や商人の動向をうかがうことができる（一 いわて 漆の歴史 ―江戸時代から明治まで―）。特に二戸地方をはじめとする各地では漆掻きの職人として越前衆（福井県今立地方からの出稼ぎ）の活動が目される。越前衆によって「殺し掻き」が広められ、それによる生産量の拡大と漆木の枯渇とがもたらされることになったとされる。

また生産される漆蠟に関連しては、どのような道具が用いられ、その工程はどういったものであるか、さらに製品としての行方（福島県会津地方での絵蠟燭となっていく）といった問題がある（二 二戸地方の漆蠟）。

殺し掻きによって枯死した漆の木はアバ、アバギ（浮子）に加工されていったことも見逃せない。漆は水中において水を吸い込みにくく、連続使用に耐え得るという利点があった。アバとして漆の木は東北・北海道に限らず西日本の各地にまで移出されていた（三 浄法寺のアバギ）。

漆を採取し、木地を生産し、塗って製品として売るといった漆器の生産と流通のプロセスを、地域のなかで全体的に描くことで見えてくる問題も少なくない。知識や技術の流入や伝播の様相、具体的にそれに関わった職人たちの動き、風土や環境に合わせた技法や販売される場を把握することが重要である（四 安比川上流域の木地と塗り）。

漆の生産と利用の場は、必ずしも重なるわけではない。漆そのものの生産地である岩手県二戸地方と漆蠟を用いた絵蠟燭や漆器の生産地である福島県会津地方、漆の供給や塗りの技術の交流から石川県輪島地方といった遠隔地との人とモノの行き来があったことは、狭い地域だけを見ては見えにくい問題が存在することを教えてくれる（五 遠隔地との交易・交流）。

近代以降の漆をめぐる問題としては、まず博覧会の記録などによって職人の動きをおさえることが必要である（六 岩手の漆 ―明治・大正時代博覧会等史料から―）。これらに出品され、評価されることを通しての技術向上の可能性や技術の様相をうかがうことができる。また一種のブランドとして地域における漆製品生産の確立や社会的な意義にも目配りが求められよう（七 大正時代の岩手の漆）。近代化の過程のなかで漆器がどのように扱われ、海外の生産地との競合がどういった問題を引き起こして、将来に向けてどのような課題が意識されつつあるのかを考えることがこうした史的な考究の最後に求められるものである（八 昭和前期の岩手の漆）。これらは全体として漆の近代を総括する叙述とすることができる。

以上から読み取れる漆の問題系をまとめると、①漆関連の史料の発掘と分析、②木材としての漆の生態と利用、③地域のなかでの漆の生産と技術（漆掻き、木地師、塗師などのかかわり）、④遠隔地をむすぶ漆・漆器の流通と人の移動、⑤近代化過程における漆の位相、ということになるか。一方で、これらに加えて民俗的なデータとしては、⑥漆をめぐる心意的な感覚や価値観の問題がある。①～⑤のような具体的な実態や道具あるいは人の動きに支えられた漆をめぐる伝承的な感覚や俗信、説話も民俗研究として、視野に入れておくべきであろう。

次節では①の漆関連の史料を岩手と隣接する旧弘前藩領で確認し、[工藤 2011] の成果を反映さ

せてみたい。

③……………近世社会における漆栽培と伝書—弘前藩領の様相

本節では、岩手とともに北奥羽地方に属する青森県津軽地方、旧弘前藩領における漆をめぐる史料の検討をおこないたい。この地域の漆をめぐる近世の様態については早く松本侃〔松木 1956〕があり、さらに近年は北嶋祐二による浩瀚な研究〔北嶋 2010〕があるので、北嶋のそれに依拠して、特に「水漆」（漆の樹液）の採取に注目して検討していくこととする。

近世日本においては多くの農事に関する情報が流通し、農書というかたちで普及していた。宮崎安貞による『農業全書』は、その初期のものとして重要な位置を占めている。この書物は、筑前国で実際に農業に長年従事していた著者が、自身の長年の経験と観察をもとに、先行する中国の農書類を参考にし、さらに各国の老農の技術なども調査して著したものである。元禄 10 年（1697）に京都で出版され、広く迎えられた。この『農業全書』の巻七・四木之類にすでに漆が立項されている。⁽³⁾

そこでは吉野地方の漆の栽培方法を最初に掲げ、植える土地、肥料、漆液の掻き採り、苗の仕立て方、漆液の扱いなどが述べられている。こうした『農業全書』の記載からは、一七世紀の終わりには、漆が有用な植物として、文字文化にも反映されながら、全国的に知られるようになっていたことがうかがえる。

本州北端の弘前藩域においても、中世期から漆の栽培が行われていたらしいが、詳細は不明である。寛永元年（1624）には漆の栽培が、藩の指導のもとで組織的に拡大するように図られた〔北嶋 2010:13〕。この時期の漆仕立（栽培）は実をとって漆蠟を得るためと水漆を採るためというふたつの目的があったらしい。寛文の頃から、水漆の割合が高くなり、多くの生産を得て、藩の外にも移出されるようになっていった〔同前:18-19〕。

天和三年（1683）五月十一日の弘前藩『国日記』には、

一、吉野善右エ門と申者、御切米金拾両壺人扶持仕出賄之外、大坂にて親兄弟之者共ニ跡扶持五人扶持被下候筈ニ相究候、此者之儀は漆・櫨・茶御国元にて植付取立申筈ニ有之候、就夫上方にて召抱差下候様ニと上方へ申遣候由申来之

とあって、上方で、漆や櫨、茶の栽培に長けた善右エ門なる人物を召し抱えたという記事がある。吉野が地名だとすると、漆掻きの先進地であった吉野から、知識と技術が導入されたと解することもできよう〔同前:20〕。

弘前藩においては一七世紀の後半に他の地域から漆掻きの技術が導入されていたらしい記録が散見できる。同じく『国日記』の寛文十年（1670）九月一日には、

一、越後より参候漁師頭八左エ門儀、漆之掻きやう漁之仕様旁細ニ申上候付、為褒美米三表遣ス
…

とあり、日本海を北上して津軽に至った越後の漁師によって漆の掻き方の改良がなされたいことが記されている〔同前：441〕。農業に従事するものではなく、漁に携わる者が漆掻きの知識をもたらしたという点が興味深い。宝永元年（1704）には無高の百姓たちが、領内の横内組宮崎村において漆や松、杉などの植栽を行っていること〔同前：27〕も併せて考えると、新田開発とともに領内の生産力拡充に努めていた弘前藩において、漆の栽培はその重要な柱のひとつであったことがうかがえる。

もちろん、こうした漆栽培の拡大はそのまま、漆の実、さらには漆液の生産拡大に結びついていた。その際には他国からの人口流入があった〔同前：511〕。これらは多く、越前・越後・庄内・秋田などから来国しており、中には近江で生まれ、漆の掻き方は信濃で習得し、上州あたりで漆掻きをしてきた者もいた〔同前：527〕。漆の植栽が盛んになり、生産性が向上するとともに、他国から知識と技術を持った人びとが移動し、また藩としても積極的に受け入れていったということが出来る。

弘前藩で代々、漆の栽培を家業としてきた成田五郎衛門家では、寛政十三年（1801）に『漆木家伝書』を作成し、同家に伝わる、漆に関する知識を書き留めている。その中には、

大山に成候得ば、掻子数多の節、越後・庄内・秋田所々の者入交り申候二付、山所数々なれハ、越後のもの壺人、庄内もの壺人、秋田もの壺人、御国もの壺人計ツ、も入交へ遣すへし。同国の者計必遣すへからず〔成田1994：196-197〕

と記されている。ここから、弘前藩の漆掻きはさまざまな土地からやってきた人びとが混成されていたことがわかる。こうした人びとを編制し、うまく使うことが成田家では大切な問題であった。それ故に『漆木家伝書』ではさらに、

凡而下人召仕には、第一喰事不貧様に致へし。殊ニ越後・庄内表の者は、常に喰貧き故に、御国表に参、美喰楽ミの第一ニ参事なれハ、随分賄等之節は、自身立障り、程よく可喰せ事也。〔成田1994：197-198〕

と記され、そうした他国の人びとの食事にまでよく気を遣うように、という注意が述べられている。

これらから漆掻きにあたっては他国、とりわけ、北陸方面からの人びとの流入が弘前藩領では常識に属することであり、こうした人びとをうまく扱い、能率よく仕事をさせることが、この地域における漆生産上の課題として意識されていたことが判明する。

こうした弘前藩の記録から、工藤紘一が解明してきた漆掻きをめぐる北陸地方からの出稼ぎ〔工藤2006, 2011〕は、近世期に既に見られるのであり、漆の栽培の拡大につれて、その重要性は地域社会の常識になりつつあったということが出来る。

次節では、こうした漆をめぐり人びとの移動に伴って形成されたと考えられる漆をめぐり俗信や説話について、考察を進めていきたい。

④……………漆の俗信と説話

漆は、人によってはかぶれやすいものであり、漆器を製造、利用していく時でも、注意を必要とするいささか厄介なものであった。また漆は農民などにとっては、特殊な技術や道具によって、ようやく利用できる不思議な存在であったとも考えられる。次にそうした漆との付き合い、心意の様相を俗信や説話を材料として考えてみたい。

漆にかぶれないようにするための俗信には、「産湯を使う際に漆塗りの箸／漆の葉／漆の椀などと一緒に入浴させれば、漆にかぶれない」（石川県、和歌山県、長野県、山梨県ほか）とか「産湯をつかう時に漆を塗った桶を用いる」(石川県ほか)⁽⁴⁾などがある。成長して後には「漆の木の所に行って盃をやり本人も酒を飲んで兄弟盃をする」（長野県）とか「うるしにかぶれた時は、うるしの木に酒を持って行って嫁入りすればよい」（新潟県）、「漆屋のめしを貰って食べればよい」（新潟県）などと言った。

これらは幼児の時から漆に対する免疫をつけさせる発想のようにも思われるが、兄弟になるとか嫁入りするというのは、漆と親しくなることが要点であったようにみられる。医学的には根拠のあることなのであろうか。

純粋に呪術的な俗信としては「土の団子を自分の年の数だけ作り、人に見られないように、うるしの木に供え、はやくなおるように頼む」（愛知県）「うるしにかぶれた者は、土で作っただんごを三つ、そのうるしの木の下においてお参りすると治る」（愛知県）などという。ここからは、強力な漆そのものに祈願をするという思考を読み取ればいいのだろうか。

民間療法としては「うるしにかぶれた時には、沢ガニをすり潰してつけるとよい。」（山梨県）、「患部にカニという字を書く」（長野県）、「蟹をつぶして汁をつける」（長野県）などとも伝えられている。漆にかぶれることを埼玉県秩父地方では「漆にかせる」といったが、ここでもサワガニを叩いて潰したものを患部に押し付けるとよい、と言われていた [高橋 1996 : 24]。

漆掻きを長年、生業とした岩手の砂森^{いさお}三男氏（大正十四年・1925 生まれ）は、漆にかぶれたら風呂に入り汗をかかないことが大切だという他に、塩や味噌をつけてかゆみを消すとか、沢蟹を潰してそれを塗る、どじょうを這わせる、杉の葉を煮てその煮汁をつける、といった療法があると語っている [工藤 2001 : 35]。また別の機会での姫田道子による聞き取りでは、漆にかぶれたら塩の湯に浴するのが一番いいとか、杉采を揉んでその汁を患部に数回塗ればよい、と言い、さらに栗の粗皮、栗の実の皮、葉でも煎じた汁を塗れば三日目には癒るとも述べている [田村・宮本監修 2012 : 74]。砂森氏は東北各地や関東を移動して漆を掻いてきた。また取引をした岩手の間屋は、福井の出身であったという。そうした活動をふまえると、漆に関する俗信は、漆掻きの人びとによって伝播した可能性もあろう。

次に漆に関する説話のうち、水底に沈殿している漆をめぐるものについて考えてみたい。日本の昔話伝承の話型のなかで、「米良の上漆」（『日本昔話大成』）、「兄弟の漆掻き」（『日本昔話通観』）と呼ばれるものがそれである。

『日本昔話大成』では「一八一 米良の上漆」として、「1 兄が淵の底から漆（朱）をとる。2 弟が

とろうと思って木の蛇をつくって淵に沈めておく。3 弟がとりに行くと、その蛇にのまれる。」と整理され [関ほか 1980 : 42], 『日本昔話通観』では「161 兄弟の漆掻き」として「① 兄の漆掻きが淵の底からたくさんの漆を取ってくると、うらやんだ弟の漆掻きが藁の大蛇を淵に沈めておく。② 兄は藁の大蛇に驚いて逃げ帰るが、あとで淵にもぐった弟は生命を得た藁の大蛇に飲み込まれる。」という粗筋が登録されている [稲田 1988 : 303]。この話は、木下順二による民話劇「木竜うるし」 [木下 1952] の原話でもあり、兄弟の優劣を印象的に述べるタイプの昔話であった。

いささか鈍いが正直な兄と目端がきき、ずる賢く立ち回る弟が登場する兄弟譚であり、水の中に沈んでいる龍という設定が、幻想的でありながら、現実にもありそうな印象を与える。さらに淵の底に漆が溜まっているという設定が実際はどうか、という関心が持たれる。漆そのものの性質として水の底に溜まるようなことがあるのだろうか。実際にはそうではないとしたら、こうしたイメージは一体どこから生まれたのであろうか。

実際の伝承記録にあたってみよう。この説話の分布は、『日本昔話通観』によれば、秋田県、山形県、新潟県、福井県、鳥取県、熊本県でそれぞれ採録されており、複数の伝承が確認されているのは山形県だけである [稲田 1988 : 303]。それぞれ、漆の生産地といえなくはないものの、産地だけに濃厚に分布するとはいえない。『日本伝説大系』では福井県福井市における伝承だけが取り上げられているが、「漆ヶ淵」と呼ばれていても作り物の蛇や龍を淵に沈めることに語りの興味が集中していて、漆には言及されない [福田編 1987 : 239-240]。以上のような分布を確認した上で、具体的に説話そのものを検討してみよう。

次に掲げる秋田県角館の場合は漆ではなく、「朱」となっているが、これは朱漆をさしているのかもしれない。

むがしあったぞん。町の下川原の葎谷地に、朱の塊が^{つばし}沢山埋まっている赤淵という深い深い淵があった。その頃下川原に兄弟の者がいて、毎日その淵の底へ潜っては朱を採って、町へ持って行って売っては暮しを立てていた。

そうして何事もなかったのであるが、弟の方は兄と違って腹の汚い者であったので、あの淵の朱を自分ばかりで取ったら、どんなに儲かるだろうと悪心を起した。

そこで一晚思案した挙句、うまいことに気が付いた。何をするかと思ったら朱漆膳を持って来て、それを合せて口にした大きは怖い形相の蛇体頭を拵えたのである。そしてそれどて、こっそり朱淵に沈めて置いたのであった。何事も知らない兄が翌日、相変らず朱を採りに行ったら、その大きな竜が真っ赤な口を開いて、自分を一呑みと来るように見えたので、蒼くなって逃げて来た。それを見た弟は、うまくいったと喜んで、それからは自分ばかり行って朱を採っては売りして大儲けをしていた。

ある日も、いつものように出掛けて、さて水へ入ろうとしたら気のゆえか、その竜が生きているように見える。何、そんな筈はない、確かに自分が拵えて浮かべたものであるのにと、自分を励まして潜ろうとした時、その竜は真実に生きていて心の悪い舎弟どて一呑みに呑んでしまった。だから決して、自分ばかりいいことをするもんでないと。なあ。(角館町 佐藤正四郎君) [武藤編 1975 : 39-40]

ここでは主人公の兄弟が、「下川原」というところに住んでおり、漆を売ることによって生計を立てていたと語られる。彼らは農民ではないのである。この昔話は農民たちの生活とは位相の異なる世界における兄弟譚ということになる。

次に山形県上市市橋下での伝承を参照してみたい。

むかしむかし、秋田の国に、うるしかきの兄弟이었다と、兄と舎弟。

ところが山の中さうるしかきに行ったらば、兄がきれいな淵眺めてみて、「こころで、喉かわいたから、水でも飲んでみっか」

て言うわけで飲んでいたらば、ほしたらば淵の底さ、うるしの塊が沈んでいだんだと。

「ははあ……」

はいつ、舎弟さ呉んな嫌んだくなつたんだどはあ、兄んつあ。ほして咄嗟に考えて、丸太切って、ほの丸太で、竜の恰好彫つたんだど。ほして、はいつ、そろんとほこさ浮かしたんだど。ほして自分ばかりくぐって行って、ほのうるしの塊、取って来たんだど。ほうしてはいつ高く売って、兄んつあいだどこだ。

舎弟は、ほたごど知しゃねし、木うるしばっかりかいて、たんとかかんねがったわけだどなね。

ほうして、水飲むべと思って行ったらば、竜いたわけだずも、ほこに。いや、ぶっ塊消^(ママ)て舎弟は、水も飲まねでもどって来たわけだど。兄んつあ、

「しめしめ、」

て、自分ばかり、ほれ、うるしの塊、中から取って来てはあ、すばらしい銭したわけだど。

あるとき行ったら、ほの竜あ生きて、なれ、兄んつあ食ってしまったんだどはあ。

んだから、自分ばかり抜けがけざあするもんでない。兄弟ざあ仲よくさんなねもんだて、世間の人あみなそういう風に言うたつたて。どんぴんからりん、すっからりん。[武田編 1982 : 209-210]

ここでは腹黒いのは兄ということになっており、その点はいささか意外であるが、粗筋は大きく異なるわけではない。語る上での舞台設定は地元の山形県ではなく、秋田のこととされている。日常の生活圏とは異なる場所での出来事とされているのである。

こうした説話は、民俗研究上は昔話として扱われてきたが、実際の伝承を確認していくと、伝説として伝えられていた場合もあった。次に掲げるのはそうした例である。

頃は享保十一年（溺死者の年忌より積算して）六月中頃能義郡布部河原に頼太と云ふ漆搔職があつた。家には弟と二人限りであつたが、赤貧洗ふ如く、其日の生活にも窮した。其頃布部奥に漆の木千本あつたれば漆液流れて川奥の淵に、漆柱漂ふた。^(ママ)頼大は毎月底も知れぬ青淵の中へザンブと飛込み、其漆柱を搔寄せて、その日への生活の資にした。弟は兄思ひに、斯る危険はよして労働せよと毎度注意したれど、危険も犯せばこそ儲かるなれと、漆採を止めなかつた。弟は何卒して止めさせんと或日、藁にて大蛇を拵へ、その淵に沈めて兄をおそれさせんとした。頼太はそんな事とは露知らず、今日は晴天なれば、早く行きて沢山かき寄せ採らんと、

早々仕度して淵に行き、裸となりザンプとばかり飛び込んだ。その時迄藁にて拵へたる大蛇が生を得て、頼太を巻き付き、忽ち大雷雨を起し、見る一〇大洪水となり、大蛇は頼太と共に中海へ流れ出た。此洪水で川奥より荒神森流れ出で、要害山麓飯田原に止つた。今に流荒神と云ふ。廣瀬月山城は、悪七兵衛景清の築城以来、麓に堀を廻らし、碁盤の目の如く町街を並べたが、此洪水に城下町も川底くなり、避難者は皆岩倉山にと登り難を避けた。水は見る一〇かさみ、岩倉寺の下、子守神社の馬場へ達した。実に古今稀なる大洪水で、多くの溺死者を出した。然るに不思議なことには布部より下流は大雷雨大洪水であつたけれども布部の奥の比田方面は晴天であつたと。洪水にて昔の富田川川床が町となり、旧の町今の飯梨川床となり、廣瀬より下流の地形に変遷を来したと、古老等も云ひ伝へ、聞くものをゾッとせしめるのである。(宇山利三郎氏報) [島根県教育会編 1927: 23-24]

これは島根県能義郡の伝承で、近世の洪水と結びつけられている。主人公たちは漆掻きとされている。それに加えて、その居住地が「布部河原」とされているのは、秋田の伝承における主人公たちの居住地が「下川原」という土地であったことを想起させる。この伝説でも主人公たちの住むのは農民の生活圏とは異なるところという設定になっているのである。

こうした話の伝播者としては、漆に深い知識を持っていた人びと、すなわち漆掻き職人が想定されるが、実態としてはどうであつただろうか。野村純一は「山村の昔話とその伝播者」と題した論考で、「余りに安易な推定」と言いながらも、山形県最上郡や岡山県真庭郡において漆掻きや漆屋(山村から漆を持ち来たった人びと)が、昔話の伝播に関わったことを指摘している[野村 2012: 224]。ただし一方で、水底に漆が溜まるようなことは、まず考えられない。漆の樹液は、水分を取り入れることによって固化する[四柳 2006a: 18-19]ので、川を流れ下り、淵底に滞留した漆を採集するという事は考えにくい。つまり、この説話の設定は漆の性質を熟知し、日常的に漆を扱う者には受け入れがたいのである。従って漆に日常的に携わっている職人が、このような話を広めるかどうか、慎重に考える必要もあるだろう。

漆を掻くのは朝の早いうちからとりかかるので、その姿は唄(民謡)にもなっていた。「うるしかきさん トンボかセミか あさまとうから木にとまる」という歌詞が広島備中漆にまつわって伝えられていた[久岡 2008: 6]が、同種の唄の分布はかなり広いことが、早くから指摘されている[岸田 1961: 17]。ここからは漆掻きの活動が広い地域にわたり、またその様子が他の人びとからも注意されてきたことがうかがえよう。

少なくとも、こうした説話の伝承の背景には、漆を貴重なものとする観念が共通していること、それが特殊な技能によってもたらされるという感覚が添えられていることは確認できるだろう。兄弟譚という昔話伝承におけるひとつの典型的な中に、漆に対するイメージが溶かし込まれていることは確かである。ただし、実際の漆の採取とは全く異なる設定がなされているという点を勘案すると、この説話を受け入れ、伝えてきたのは、漆掻きの作業そのものとは直接関わらない人びとであるともいえるだろう。

ここで問題としてきた淵に漆が沈殿しているのを発見するというモチーフは、近世にすでに文字に記録されている。そうした資料も検討しておこう。管見の及んだ限りでは『諸国百物語』(延宝

五年・1677刊)の巻之五の十三話「丹波の国さいき村いきながら鬼になりし人の事」がもっとも早い。そこでは、以下のように記されている。

丹波の国さいき村と云ふ所に、あさゆふまづしきものあり。をやにかうへ第一なる人なりしが、あるときたきゞをとり山へゆかれしに、をりふしのどかわきければ、谷にをりて水をのまんとして水中を見れば、大きな牛のよこたをれるやうなる物あり。ふしぎにおもひよくへ見れば、ねんへ山よりながれをちてかたまりたるうるし也。是れひとへに天のあたへとおもひて、此漆をとりにかよひ、ひだと京へもち行きうりければ、ほどなく大ぶげんしやとなりける。此となり大あくしやうなるものありけるが、此事をつたへきゞ、いかにもしてかものゞ、此所に来たらぬやうにして、わればかりとらんとたくみて大きな馬めんをかぶり、しやぐまをきて鬼のすがたとなり水のそこに入り。かのものをまちければ、いつものごとくかものうるしをとり来たりてみれば、水のそこに鬼あり。おそろしくおもひてにげさりぬ。かのあくしやうのもの、しすましたりとよるこび水のうちよりいでんとすれどもうごかれず。そのなりにてしにけると也。[太刀川校訂1987:134-135]

丹波国で、大きな牛が横たわっているかのように見える漆の塊を水底に発見した者がいた。それを隣の悪人が、独り占めしようとして鬼の姿に扮して、水底で他の者を脅かしたまではよかったが、そのまま動けずに死んでしまった、というのである。

口頭の昔話では兄弟譚であったものが、ここでは隣人が真似をして失敗する、いわゆる隣の爺型になっているといえるかもしれない。そして話のきっかけとして、水底に漆が溜まっているのを発見した、という語り方は、昔話と共通している。

おそらく、この説話に取材して井原西鶴も同様の筋書きの話を、親不孝譚として仕立て直している。すなわち、貞享三年(1686)刊の『本朝二十不孝』巻三「心をのまるゝ蛇の形」である。

…(前略)…そもへ、有徳に成けるは、山里に通ふ時、大隈川の水上に細き枝河の続き、其流れの元は、谷ふかく、岩組するどにして、落かゝる滝の音に耳を轟かしぬ。木立茂みて、陰闇く、葉ずゑに白玉砕き、不断時雨のごとし、水底、夏さへ氷を破ぬ。此川に江鮭の魚住けるに、武太夫水練をえて、是に入、手どらへにして、たびへ人をもてなしける。有時、測と思ふ所を搜けるに、黒き物、山のごとく見へけるを、一抓取てあがれば、峰より年々流れ込てかたまりし漆なれば、忍びて器を拵へ、我宝にして取て帰り、是を商売するにぞ、只取金銀、後には置所もなかりし。人みな気を付けければ、猶欲心深きたくみして、細工の上手に竜をつくらせ、水中に沈め置しに、さながら生て動くごとく、日数ふりて是をみるに、口を動かし、尾を延、劔を縮め、それとは知らず恐ろし。此事、宿に帰り、親に語れば、「されば、人間は欲に限りなし。此上の願ひ、何か有べし、平に止よ」と、様々異見せしに、帰て親に仇をなし、己が一子に武助といひし十四になるを引連て、彼測に行きて、次第を語り聞せ、「我ごとく取ならへ」と、親子共入しに、最前の竜に精有て、武助を喰て振とみへしをかなしく、藻屑の下に身を沈め、武人共息絶て、二十四時を過て骸の上りけるにぞ、見る人、「親の恥なり」と憎み、

「哀」と云者なし。…（後略）…。〔富士ほか校注1991：449-450〕

引用に際してルビは略したが、ここでは欲深い親子がその親の言うことを聞かずに漆を取ろうと水底に潜ったところ、精があるようになった竜に殺されてしまった、という話になっている。水底の竜という趣向は、ここから登場する。

なお、この「心をのまる、蛇の形」は陸奥国宇都宮が舞台とされていて、西鶴の大雑把な地理感覚とともに漆の流れ込むような淵の所在は、みちのくがふさわしく思われたのであろうことにも注意しておきたい。

このように山あいには漆が流れ込み、溜まっている淵があるのだろう、という想像力は、奇事異聞として、現実味を帯びながら広がっていたのであろう。本草学者の佐藤成裕が著した『中陵漫録』（文政九年（1826）成立）の巻之八「怪淵」の最初の部分にはやはり、この種の説話が記されている。

備中松山より作州の温泉へ行路に、漆淵と云淵あり。昔漆の荷物を覆して、此淵の底に沈む事あり。百年を経て、或人、兄弟にて此底中に入て漆を得る。漆のみならず、高価の物を得たり。是れに因て、弟、其兄に大利を得られんことを悪み、獅子の頭の様なものを作りて、此水底に置き、異日、兄の恐て入ん為に此謀を為す。異日、兄来て入んとすれば、大に恐れて空く帰るなり。弟、益悦て往て入る時は、其獅子の頭、忽に來て噛むと云。…（後略）…〔日本隨筆大成編輯部編1976：185〕

ここでは漆の荷が淵に沈んだのを兄弟が知り、弟が兄を獅子頭で脅すが、弟自身はその獅子頭に噛まれてしまったとされる。話として昔話にかなり近づいているようにも思われる。少なくとも淵の底の漆をめぐっての説話的な興味が生じていたといえるだろう。しかし、先に述べたようにこの種の話の前提である水底の漆とその採取ということは実際には起きようのない、想像上の設定であった。こうした想像が、一七世紀後半からかなり広く、長く、行き渡っていたということになる。そのことは、庶民の漆に対する感覚が、現実の漆の性質とはかけはなれていたことを示すと言わざるを得ないだろう。

おおよそ近世には記録もされた漆が水底に溜まっているというモチーフを発端とするこの種の説話は、必ずしも伝承例が多いわけでもなく、漆搔きのように漆に直接、関わる人びとによって、伝播されたわけでもないようである。西鶴が浮世草子に仕立て、口頭の伝承では兄弟の役回り（善人と悪人）が入れ替わったり、あるいは伝説として伝えられたり、といった具合に不安定な姿を呈していた。現実には根ざしていない説話の宿命といえるのかもしれない。

なお、庶民の漆観を探るという点では、財宝の表現としての漆もそれなりの厚みのある問題として登録しておきたい。岩手県遠野地方の民譚を集めた『遠野物語』（1910年）の六三にはマヨヒガという山中の不思議な家の伝承が記されている〔柳田1997（←1910）：31-32〕。この家には「朱と黒との膳椀」が大量にあり、それは奇妙な力を発揮したと語られている。膳椀が朱と黒であったといふところから漆器に違いないと判断され、また、そこに遠野のふだんの暮らしとは異なった雰囲気を示されていると指摘しておきたい。

また日本各地の長者伝説には付随する謎めいた歌には黄金とともに漆が出てくる場合が多い。柳田國男の『山島民譚集』(1969年増補版刊行)「第九 朝日夕日」には類例が多く取りあげられている。武蔵の中野長者(成願寺・正観寺)の伝説には、中野長者が「漆千杯朱千盃黄金千両銭十六万貫朝日さす夕日かゞやく藤の木の下にあり」と宝のありかを書き残したといい、日向志布志の宝満寺の伝説には「朝日さす夕日輝やく木のもとに黄金千両漆千盃朱千盃あり」と観音堂の棟札に書かれていたという[柳田1969:277-283]。このように黄金や朱とともに漆が長者が持っていた財宝の端的な表現として用いられ、伝えられてきたのはなぜなのだろうか。ここからも、漆のイメージの民俗的な展開を探っていく必要性を見出すことができるように思われる。

さらに、実は民俗的な漆観とかかわると思われるものとして、「椀貸し淵」などと称される伝説も想起される。これは、かつては特定の手続きを経れば、大量の膳椀を異界(特に水界)から借用することができた、とするものである。しかし、ある時期からそれが不可能になったという筋書きは、漆器を扱う人びととそれ以外の人びととの交渉の段階が投影されているようにも思われるのだが、こうした視角からの分析は管見の範囲では見当たらない。

以上、本節では、漆を実際に扱う技術や知識と、こうした説話を伝え、もてはやす生活との間には大きな溝あるいは、距離があったことが確認できた。そしてそのことを確認したうえで、こうした説話も、また庶民の漆観のひとつであることを意識しながら、広義の漆文化を考えていくべきといえよう。

⑤……………おわりに一さらに考えるべきこと

ここまで論じてきたように、日本の民俗文化のなかには、漆の生産や流通に支えられるかたちで、あるいはそれらを背景、基盤として、さまざまな漆に関する技術や知識、説話が展開しているのであり、民俗学的には「漆の民俗」として総合的に考察を進めていく必要がある。漆の伝承は、漆の科学的な性質や工芸の技法とその発展過程とは異なるものの、日本文化のなかで漆に対する独特の感覚や意識を構成しているのであり、それ自体の意味や変遷は漆の文化全体を考える上でそれなりに重要だと考えられる。ここで指摘したり、わずかながら検討を試みたことは、民俗文化における漆の問題としてはごく一部に過ぎず、さらに考究を重ねていかねばならない。

本稿で検討してきた漆をめぐる民俗的な資料とその成果をふまえて、今後の研究課題をまとめてみると、第1に木材としての漆の生態と利用、第2に地域のなかでの漆の生産と技術、第3に遠隔地をむすぶ漆の樹液の流通と人びとの移動、第4に近代化過程における漆の位相、第5に漆をめぐる俗信と説話およびその背景といったものを挙げることができる。これらは相互に複雑にからみあっており、総合的な考察も必要ではあるが、ひとまず、こうした課題に分節することで、研究上の指標とするべきと考える。

なお、漆をあつかう人びとが持っていた信仰についても注意をはらうべきであるが、本稿ではふれることができなかった。塗師・漆器商人の虚空蔵菩薩への信仰は有名であるものの、山間を移動する漆掻きは、独自の、または特異な信仰は持ち伝えては⁽⁵⁾いなかったようである。こうした積み残した問題については個別に、今後も考究を重ねていくこととしたい。

註

(1)——漆は日本・朝鮮半島・中国などに生育しているが、日本列島においては春の開葉が遅く、秋の落葉が早いために人の手が入らないと生育できない〔国立歴史民俗博物館編2017:16〕。また東南アジアにも樹液を採集して、用いる樹木類が生育するが、その品質は異なり、DNAレベルでの違いが判明している〔同前:23〕。こうした性質をふまえ、縄文時代から漆の樹液を利用してきた点において、漆は日本列島社会における特産ということが可能である。

(2)——砂森栄三男氏からの聞き取り記録としては姫田道子『漆かき見聞記』〔田村・宮本監修2012:45-86〕もある。

(3)——『農業全書』については〔宮崎1697〕を参照。

(4)——以下の俗信は特に注記しない限り、〔鈴木1982〕による。

(5)——こうした問題については〔橋本1993〕、〔佐野

1996:301-315〕が参考になる。なお、現在でも京都嵐山法輪寺の境内には、一九八八年一月一日に日本精漆工業協同組合・全国漆業連合会によって建てられた「うるしの碑」があり、そこには「漆は古くからその堅牢で潤いのあるしっとりとした美しさが愛されてきました文徳天皇の第一皇子 惟喬親王（八四四～八九七年）が当寺に参籠され 本尊虚空蔵菩薩より うるしの製法と漆塗りの技法を御伝授されて完成し 日本国中に広められました その参籠満願の日が十一月十三日と いわれています 漆業関係者は当日を うるしの日と定め毎年 お詣りして漆業の発展を祈願しています このように虚空蔵法輪寺はうるしにゆかりの深いお寺です ここに漆文化の象徴として うるしの碑を建立しました」と記されている。轆轤との関係で知られる惟喬親王と虚空蔵菩薩とが漆を媒介として結びつけられていることが確認できる。

引用・参考文献

- 網野善彦 2001「栗と漆」『中世民衆の生業と技術』（東京大学出版会）：131-150
- 稲田浩二 1988『日本昔話通観28 日本昔話タイプインデックス』（同朋舎出版）
- 煎本増夫 「江戸幕府と津久井漆一寛永期の津久井農村一」『神奈川県史研究』9:16-36
- 鏡湖九六郎 1936「漆掻きとおち権現」『高志路』19:54-55
- 河岡武春 1968「漆かきの村」一奈良県吉野郡西吉野村賀名生一『民具マンスリー』1(1):2-3
- 河岡武春 1969「吉野の漆かき」日本常民文化研究所編『民具論集1』（慶友社）：45-75
- 河岡武春 1985「吉野の漆掻き」森浩一ほか『日本民俗文化大系（第13巻）技術と民俗（上巻）一海と山の生活技術誌一』（小学館）：151-153
- 岸田定雄 1961「吉野の漆掻き」『民俗』4(5):16-18
- 北嶋祐二 2010『弘前藩の漆行政』（自刊）
- 北野信彦 2005『近世漆器の産業技術と構造』（雄山閣）
- 木下順二 1952『木下順二民話劇集（二）』（未来社）
- 桐生海正 2018a「近世相模国柳川村周辺における漆液の生産と流通」『郷土神奈川』56:26-43
- 桐生海正 2018b「小田原藩領の村々と漆液の流通統制」『金鯢叢書（第45輯）』（徳川林政史研究所研究紀要第52輯）（徳川黎明会）：71-97
- 工藤紘一 2001「漆かき一代 一砂森栄三男の記録一」『岩手県立博物館研究報告』18:29-72
- 工藤紘一 2006『南部の漆を支えた人びと 一越前衆の軌跡一』（川口印刷工業）
- 工藤紘一 2011『いわて漆の近代史』（川口印刷工業）
- 工藤紘一 2015「消えた漆掻き道具」『岩手の民俗』11:3-18
- 工藤紘一 2017「明治末期・大正期の漆一農商務省山林局発行の三冊の報告書から一」『岩手史学研究』98:49-63
- 国立歴史民俗博物館編 2017『URUSHI ふしぎ物語 一人と漆の12000年史』（国立歴史民俗博物館）
- 坂上洋之 1989「多摩の漆」『羽村町郷土博物館研究紀要』4:28-37
- 佐藤武司 2005『あっぱれ津軽の漆塗り』（弘前大学出版会）
- 佐藤武司 2013「津軽漆工品の呼称について」『市史研究ひろさき』10:122-133
- 佐藤守・佐田玄治・羽田新・板垣幹男 1962『徒弟教育の研究 一漆器徒弟の社会史的分析一』（御茶の水書房）
- 佐野賢治 1996『虚空蔵菩薩信仰の研究 一日本的仏教受容と仏教民俗学一』（吉川弘文館）
- 島根県教育会編 1927『島根県口碑伝説集』（復刊・歴史図書社）
- 鈴木棠三 1982『日本俗信辞典 一動・植物編一』（角川書店）

- 須藤 護 2010『木の文化の形成 ー日本の山野利用と木器の文化ー』（未来社）
- 須山 聡 1992「石川県輪島市における漆器業の発展」『地理学評論』63A (3) : 219-237
- 須山 聡 1993「職人の地域的移動パターンからみた輪島漆器の生産地域の拡大」『地理学評論』66A (10) : 597-618
- 瀬川 修 2011「岩手の漆」『民具研究』143 : 55-60
- 関 敬吾ほか 1980『日本昔話大成 11』（角川書店）
- 高島緑雄 「貢租としての漆について」木村 礎編『封建村落 その成立から解体へー神奈川県津久井郡一』（文雅堂書店）: 141-159
- 高橋 稔 1996「秩父の漆掻き職人」『埼玉民俗』21 : 22-36
- 竹内康平 1984「金沢職人のライフヒストリー 奥本留次郎ー漆器職人ー」金沢民俗をさぐる会編『都市の民俗・金沢』（国書刊行会）: 185-199
- 武田 正編 1982『佐藤家の昔話』（桜楓社）
- 太刀川 清校訂 1987『百物語怪談集成』（国書刊行会）
- 田中庄一 1981『南部うるし』（名著出版）
- 田村善次郎・宮本千晴監修 2012『宮本常一とあるいた昭和の日本 23 漆・柿渋と木工』（農文協）
- 著者未詳 1998（← 1834）「塗物伝書」佐藤武司ほか校注『日本農書全集（第 53 巻・農産加工 4）』（農山漁村文化協会）: 159-209
- 外山 徹 2016「米沢藩領における漆液の採集プロセスについて」『明治大学博物館研究報告』21 : 25-33
- 成田五右衛門 1994（← 1801）「漆木家伝書」福井敏隆ほか校注『日本農書全集（第 46 巻・特産 2）』（農山漁村文化協会）: 179-235
- 日本随筆大成編輯部編 1976『日本随筆大成（第三期第三巻）』（吉川弘文館）
- 野村純一 2012「山村の昔話とその伝播者」『野村純一著作集（第 6 巻）』（清文堂出版）: 217-228
- 橋本鉄男 1993「漆祖伝承覚書」『漂泊の山民ー木地屋の世界ー』（白山社）: 54-74
- 橋本芳弘・佐藤武司 2000「中畑氏の漆掻き道具製造法」『青森県史研究』4 : 46-56
- 馬場 章 1981「海南・会津における漆器工業の技術転換と生産構造の差異」『地理学評論』54 (9) : 493-512
- 馬場 章 1986「静岡・木曾漆器工業地域の技術と生産構造の変化」『地理学評論』59 (4) : 213-227
- 馬場 章 1990「鯖江における漆器工業の技術変化と生産構造」『歴史地理学』148 : 1-11
- 羽生淳子編 2019『レジリエントな地域社会 Vol.2 漆の木のある景観ー岩手県二戸市浄法寺における漆掻きと日々の暮らし』（総合地球環境学研究所）
- 半田市太郎 1970『近世漆器工業の研究』（吉川弘文館）
- 久岡武美 2008「県北の漆掻き」『広島民俗』70 : 1-14
- 広田寿三郎 1992「魚津漆器の研究（1）ー石黒清一漆器店の調査ー」『魚津市立博物館紀要』3 : 41-50
- 福田 晃編 1987『日本伝説大系（第 6 巻）北陸編』（みずうみ書房）
- 富士昭雄ほか校注 1991『新日本古典文学大系 76 好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』（岩波書店）
- 卷山由子 1992「資料報告・平沢の漆器職人について」『長野県民俗の会通信』109 : 6-7
- 松尾健介 1949「会津藩の漆生産について」『三田学会雑誌』42 (4) : 50-63
- 松木 侃 1956「津軽藩の漆樹栽培一名産「津軽塗」前史」『社会経済史学』22 (3) : 113-124
- 松崎かおり 1993「経済的講の再検討ー「輪島塗り」漆器業者の頼母子講分析を通してー」『日本民俗学』193 : 63-104
- 武藤鉄城編 1975『角館昔話集』（岩崎美術社）
- 松田権六 1964『うるしの話』（岩波書店 [新書]）
- 松田権六 1981『うるしのつや』（日本経済新聞社）
- 宮崎安貞 1697「農業全書」山田龍雄ほか校注『日本農書全集（第 13 巻）』
- 柳橋 真 1985「浄法寺の漆掻き」森浩一ほか『日本民俗文化大系（第 13 巻）技術と民俗（上巻）ー海と山の生活技術誌ー』（小学館）: 148-150
- 柳田國男 1997（← 1910）『遠野物語』（『柳田國男全集（第 2 巻）』（筑摩書房）
- 柳田國男監修・日本放送協会編 1950『日本伝説名彙』（日本放送出版協会）
- 柳田國男（大藤時彦・関敬吾編）1969『増補山島民譚集』（平凡社 [東洋文庫]）
- 四柳嘉章 2006a『漆 I』（法政大学出版局）
- 四柳嘉章 2006b『漆 II』（法政大学出版局）
- 四柳嘉章 2009『漆の文化史』（岩波書店 [新書]）

-
- 若林喜三郎 1952「輪島漆器の生産組織」『金沢大学教育学部紀要（人文・自然）』1（1）：70-75
渡辺史夫 1989「近世における羽州村山地方の漆生産と越後商人」『山形史学研究』23：11-23
渡部史夫 1996「近世期，村山地方における漆の生産と流通」『山形県立博物館研究報告』18：23-34

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2019年5月28日受付，2019年10月7日審査終了）

Folklore Issues Surrounding Lacquer

KOIKE Jun'ichi

Lacquer played a vital role in the life and culture of the Japanese archipelago. Lacquer, as we see today, was very different in the premodern era; this is because of the changes in the industrial structure; these changes have greatly deteriorated the value and social importance of lacquer. Hence, lacquer is becoming a thing of the past. However, this aspect does not mean that it possesses no folkloric value or its examination is not necessary.

Therefore, this study conducts a preliminary assessment to acquire a comprehensive understanding of the role of lacquer in various areas of daily life in the past from a folkloric viewpoint. For this purpose, I first consider the results of studies and research surrounding lacquer in folklore studies until today and confirm their awareness of issues and concrete study contents. Further, I confirm aspects of early modern lacquer tree cultivation and sap that constituted the background in which various folkloric phenomena surrounding lacquer were developed, with an emphasis on the historical material of the Kitaouu Region (Hirosaki Domain). I then discuss traditional folk beliefs and stories surrounding lacquer and try deducing the issues related to lacquer in daily life. This study hence takes a general viewpoint of the historical material surrounding lacquer since the early modern era to deduce issues for advancing folkloric research on lacquer and present directions for future research.

I thus conclude the following folkloric research issues surrounding lacquer: (1) the ecology and use of lacquer as a wooden material, (2) the production of and technology related to lacquer in the region, (3) the distribution of lacquer tree sap and the movement of people that connect distant areas, (4) phases of lacquer in the process of modernization, and (5) the folklore beliefs and stories surrounding lacquer and their background.

Key Words : Water lacquer, lacquer tapping, “*Echizennshu*” (越前衆) * , rash, “*Mokuryu Urushi*” : Woodn Dragon and Lacquer (木竜うるし)**

* “*Echizennshu*” (越前衆) the people came form Echizen (越前)

** * 「*Mokuryu Urushi* (木竜うるし)」 : A folklore drama written by KINOSHITA Junji